

第3回 長野県火山防災のあり方検討会 議事録

- 日 時：平成28年11月2日（水）15：00～17：00
- 会 場：長野自治会館 第1特別会議室
- 出席者：「出席者名簿」のとおり

■内 容：

1. 開会

2. 挨拶

- ・座長よりの挨拶

野池明登 座長

(長野県危機管理監
兼危機管理部長)

長野県危機管理部の野池でございます。本日は第3回の火山防災あり方検討会ということで、大変お忙しいなか、お集まりをいただき、心より感謝を申し上げます。

秦先生は、今、駅からこちらに向かっておられるということで、程なく着かれると思います。

これまで2回、検討会を実施したわけでございますけれども、ビジターセンターにつきましては、全国調査を実施し、また、有珠山の火山マイスターにつきましては、秦先生に代表で、現地調査をしていただきました。

また、個別にそれぞれ専門の委員の皆さま方にご意見をお聞かせいただく、そんな場面もつくらせていただいて、今日に至っているわけでございます。

今日は、中間取りまとめの案を用意させていただきました。これはたたき台ということで、本日、この会議で、中間取りまとめということにするということではなくて、さまざま、ご意見頂戴いたしまして、さらに、この案について、それを反映させ、修正等もいたしまして、中間取りまとめにしていきたいと考えております。

今日も、冒頭レクチャーをいただいて、私どもの議論の参考にさせていただきたいと考えております。忌憚のないご意見を多数いただければと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

3. 説明

(1)「臨床環境学の手法を応用した火山防災における課題解決法の開発について」

(名古屋大学大学院環境学研究科 山岡耕春 教授より)

山岡耕春 委員

(名古屋大学大学院環
境学研究科教授)

はい、承知いたしました。座ってお話をします。皆さまのお手元でございます、この見開きのパンフレットに従ってお話をしたいと思います。

表紙にですね、今、部長からご紹介をいただきました、非常に長いタイトルは、これはヒアリングの応募のためのタイトルですので、もう少し短くしないと話になりませんので、短く、臨床火山防災学プロジェクトというのが、我々の通称の短いプロジェクト名でございま

す。

それから昨年からです、文部科学省から受託研究としていただきました、地域防災対策支援研究プロジェクトの一部として、1つの課題として進めているものでございます。

全国で、今、この関係するプロジェクトがスタートの段階で10区ありまして、私たちは5年計画のうち3年目から加わりまして、11番目として加わっております。

この、何を指してやっているかという、あるいはどうしてこれを目指そうと思ったかということのモチベーションのところですね、表紙の御嶽山の中に背景となっております写真の下のほう、白抜きの文字に書いてございます。

御嶽山の噴火を通じて、行政の横の連携が地域防災にとって課題であるということがわかって、見えてきたというところが一番重要で、いろんな組織が火山に関係しては一生懸命お仕事をされていることは認めつつも、必ずしも横の連携、有機的な連携が十分できていないかというように思っている、というところがモチベーションですね。

それを何とか、横の連携をどう取ったらいいかということを考えるために、白山と御嶽山と焼岳地域、この3ヶ所を対象としてワークショップなどを中心に、つまり意見交換会を中心として連携を図るという試みを行うというのがこのプロジェクトの、簡単に言えばそういうところでございます。

組織はですね、一番下に書いてございますけれども、名古屋大学がもちろん受託を受けた大もとですけど、実施協力機関としては、岐阜県、長野県、石川県。それから市町村、高山市、下呂市、白川村、松本市、木曽町、王滝村、白山市。それから大学としては、金沢大学と京都大学に協力をお願いして、これを進めてございます。

1枚めくってというか、内側を見ていただくといろいろと書いてございますが、火山における地域防災の課題というのは、基本はコーディネーションの問題だろうと。それから全体としてどう整合性をとっていくかということです。これは、それぞれの組織が予算要求というのを、それぞれ独自に行うことは、これはもう避けて通れないところですけども、それが予算を取ったからやりましょうという話にすると、結局、なかなか横の連携はとれないので、結果として、何か整合性がとれるような予算要求ができるといいよねと思いつつ、どういう仕掛けができるかということを考えてということでございます。

現在、火山防災に関しては、それぞれの火山で火山防災協議会というものが組織されています。それが左下ですけども、火山防災協議会ってどういうイメージかという、その写真にございますように、非常に多くの方々が集まって議論をする。実際には、議論をするというよりは、最終的な意思決定を行うという組織として非常に重要なものではありますが、さすがにこれだけ多くなると、議論をこの場で行うということは、現実的には不可能であるということです。

ですから、ここで意思決定を行う前の企画をどういうふうにするかということが重要です。それで1年ですね。それ右上のように、最初、スタートのときに考えたのは、白山と御嶽山と焼岳に対して、防災行政担当者の方々と火山防災協議会に関係する方々、さらに住民、観光業者等のステークホルダーと言われる方々を対象とした意見交換会を行うと。大人数で一気に行うとなかなか意見が出ませんので、少人数に分けつつ、それぞれの方がしゃべることによって自分で考えていただくような環境をつくるということを、これで行ってまいりました。

これは私たちの専門ではないので、そういうふうな専門な方、先生、中村さんという方に、そういう仕切りをお願いしてやっているわけですけども、そんなような形で行ってまいっております。

昨年度は行政担当者の方々、それから火山防災協議会のメンバーというところで議論を行ってまいりました。それで、どういうふうに具体的に行っているかという、その右下の、学習会とワークショップと書いてありますけれども、形が大体できていてですね、専門とされる方に1時間か1時間半ほど講演していただき、その後二、三時間かけて、意見交換を行うということでございます。これは行政の試みではないので、特にここから何かを発信するとか、あるいは声明を出すとか、勧告を出すなんていうことは、ここでは目的にはしてございません。この写真は、荒牧先生です。一番最初に荒牧先生がお話をしてくれましたが、こんな形で行ってまいりました。

この中で見えてきたのは、通常の火山防災協議会とか、そういう会では、何と申しますか、組織を背負った個人が発言をすると。だから、組織としての発言をするところが中心になるというのが、どうしてもそういう形になると思いますけれども。公式の会議をやるとどうしてもそうなるのは確かだなということですので、ここの学習会ワークショップはそれとちょっと対極ですね、それぞれの組織に詳しい方々が個人として意見交換をすると。ですから、そこで何を言っても特に

責任を問われるわけではなくて、うちの組織はこういうことを言っているが、俺はそうは思わないという意見であっても、それは全然構わない。つまり全体としてコーディネーションができるように、それぞれの方が全体の立場に立って考えるという場が、こういう会でできるのではないかというのが、これが1年やってみて思ったところでした。

本年度は、昨年の試みを受けて、住民、観光業者等のいわゆるステークホルダー、つまり防災の主体となる方々を巻き込んで行いたいということを考えております。そのようなことを行うことを計画しております。既に焼岳は先月実施しました。今月、白山を対象にして行い、来月は御嶽山を対象にして行います。

御嶽山については、ここに今日来ていらっしゃる河野先生に講演をお願いしておりますが、そのような形で全体としては地域の振興の問題、観光とかそういう問題と、それから防災についてがテーマになるというふうに考えてございます。

そのようなことを3年計画で進めていて、最終的に、これがもしそれぞれの行政の方にうまくいきそうだな、よかったというふうに思っただけであれば、特に、そんなにお金がかかることではありませんので、定期的に継続していただくといいのではないかというふうに、現在は思っております。

一番後ろは、名古屋大学の環境学研究科の説明と、臨床火山防災学の説明ですが、環境学研究科というところは、私の承知してるところはですね、理学と工学と人文社会の先生たちが一緒になっていて、何というか、お互いに顔が見えて話のできる関係にあるということが、一番特徴です。

その中で、地震火山研究センターというのと、持続的共発展教育研究センターという2つのセンターがあり、地震火山のほうは、どちらかというと理学的なもの、それから持続的共発展というのは社会科学的なところを中心としたテーマになっていて、そこが協力してここを、今回のプロジェクトを推進するということになってございます。以上が簡単でございますけれども説明です。

(2)「環境省におけるビジターセンターの考え方について」

(環境省長野自然環境事務所 中山隆治 所長より)

中山隆治 委員

ご紹介にあずかりました環境省長野自然環境事務所の中山でございます。お手元の青い資料、私の人となりも書いてありますので、名

事務所所長)

刺がわりに出しておきました。私、信州大学のOBでございまして、それで二十何年ぶりに長野に戻ってまいりました。

普段は国立公園の管理を専ら生業にしてきて、二十何年かのうちの半分くらいは、現場の管理をしております。それで、お手元の資料にはないですが、行った先が最初は海だったんですが、その後白山に参りまして3年ほどいて、ご承知のとおり火山でございまして。

そこから火山との付き合いが始まって、次に、東京でしばらく働かされた後に北海道にまいりまして、利尻山とか、それから大雪山、それから支笏洞爺国立公園、これ樽前山ですね。昭和新山とか、当時、ちょうど有珠山が噴火した直後で、西山火口ですけども、そういった時期に北海道にいました。

その節には、前回、欠席させていただいたのですが、この間、報告があったとお聞きしておりますけれど、洞爺湖のビジターセンター、それから併設されている火山科学館の基本構想とかですね、その辺の有珠山の復興関係の仕事をさせていただいておりました。それで今回話をさせていただくことになったのかなと思います。その後、小笠原にも行っております。そういった役人人生を送ってまいりました。

今、お話ししたとおり、国立公園はたくさんありまして、全国に今、僕も数がよく分からない、33ヶ所ですか。何で分からないかというと、今、ばんばん増えていて、ついこの間もやんばる国立公園というのを指定させていただくことになりまして、今、空前の指定ラッシュになっているんですね。世界遺産登録の関係とかございまして。

その中で、当省の管内であります妙高戸隠連山国立公園も、上信越から分離独立させていただいたということもありました。

今言った上信越高原と妙高戸隠連山と、それから中部山岳の3つの国立公園の管理をしております。この国立公園については自然公園法という法律がございまして、この法律に、この第1条、紙でいうと3枚目ですね、目的があります。優れた自然の風景地を保護するとともに、その利用の増進を図る、2つの目的がございまして。保護と利用というのですが。この利用の増進を図る中で、具体的にはどういうことをやっていくかということ、今日、今回のこの検討会でも話題になっていますビジターセンターとかそういったものが、その利用のための施設になっているということでございます。

利用の施設は、その下を書いてあるのですが、たくさんありまして、ホテルとか避難小屋とかそういったものもあるのですが、黄色くなっているところに休憩所、それから一番下に博物展示施設と書いて

あります。これが、博物展示施設というのは、主にビジターセンターのことで、それから、休憩所の中でも高機能な休憩所をつくるということで、ビジターセンター機能を持たせてあるようなケースもあります。そういったものを、環境省の公共事業としてつくったり、以前は環境省から補助事業として都道府県さんにつくっていただいたりもしていた時期がございます。

ここに、国立公園のイメージ図みたいな感じなんですけど、お山がありまして、そこに色々な法律で保護の規制をかけます。ちょっと色が付いている下の地図みたいなのがあって、公園計画図というものがありまして、こういった地図の中で、どこの規制を厳しくするかは、色分けをすると同時に、赤い丸とか、青い線とか、緑の線とか、赤い線とかあります。これが利用施設の配置になります。こういった形で計画を進めていまして、この4ページ目の下側にあるのは、洞爺湖のもので、この下側にある黄色い集団施設地区というのが洞爺湖温泉町になります。ここに前回ご説明いただいた洞爺湖のビジターセンターがございますが、そのほかにも黄色い2つのところに、小さなビジターセンターがございます。洞爺湖は、全国的に見てもビジターセンターが多いところなので、これが普通だというわけではございません。

今回、私の管内であります上高地の例を少しお話ししたいと思います。上高地も特殊なところで、2つのビジターセンターがございます。1つは上高地インフォメーションセンターというのがございます。これは下に、入口タイプのビジターセンターと書いてありますが、まさにその利用の場所の入り口につくってあるという形のものです。

上高地の概略図というのが次のページにございまして、このものがあるんです。この右下のほうを見ていただくと、インフォメーションセンターというのが四角い赤い箱で示されております。文字は、青の白抜きですね。バスの駐車場、バス停の近所にございまして、そのほかに上高地観光センターというのがあったりして、ここに利用者の利便のための施設が集中させてあると。その中でインフォメーションセンターもあります。

例えば、観光案内所とか、それから手荷物預かり所とか、郵便局とかもありまして、インフォメーションセンターの中には、次のページ、下の段になりますけれども、例えば、アニメーションにしてあるので重なっていて恐縮なのですが、警察の臨時警備派出所とか登山相談所も入居していたり、2階にはうちの事務所も入っているような形になっております。例えば、その機能としては情報提供という楕円があり

ますけれども、これが1つ、一番大きな機能で、それでインフォメーションセンターです。これインフォメーションカウンターがございまして、ここに人を置いて、お客様にさまざまな情報を提供すると、相談に乗るような形になっています。また、タッチパネル式のデータを見てもらうようなものも用意されております。そのほかに休憩スペースが大きくとってあって、シャワーなんかもあります。そこに、2階にはギャラリーがありますが、ちょっとした展示を置いて情報提供をしていると。火山情報と書いて、ちょっと大きめの写真がオーバーラップしてるんですけど、インフォメーションセンターで今現在提供している火山情報は、こういった掲示板に松本市さんとか気象庁さんが出された諸資料を張り出すという形でのみしか行われていません。タッチパネルに若干焼岳に関する情報が入っていると聞いています。

ビジターセンターというのが、ちょっと奥のほうにございまして、これはどちらかというと、じっくり見ていただくような施設になっています。ちょっと大きめの施設になっていますが、大きいといってもそんなにすさまじく大きいわけではなく、あくまで主人公は自然だという考え方で、大きな建物は作りません。この平面図を見ていただくと、先ほど話しました、ガイドカウンターがあって情報提供しているほかに、ライブラリーがありまして本を貸し出したり。それから休憩のスペースもありますが、むしろ展示や映像レクチャーが中心になっています。ここで上高地の風景とか、それから自然環境の情報提供をしているんですが、展示については主に山の写真、高名な写真家の方々の写真を提供していただいて、それを見せているような形になっていまして、実は山の火山の展示はありません。ここではインフォメーションセンターでやっている張り出しすらやってないというふうに聞いています。

次のページになりますけれども、ビジターセンターはあくまで脇役で、主役はフィールドと書いてありますけれども、お客さんはですね、箱物を見たくて来るわけではなくて、あくまで上高地に来ますので。上高地の自然景観を楽しみに来るので、それに対しての情報提供をするのがビジターセンターでしかなくてですね、第1回のご紹介があったような、例えば雲仙の大きな施設、ああいったような施設でお客さんを集めるようなことはしません。要は、あくまで、この山に来た方々に情報を提供するのがお仕事ということでございます。ですから余り大きな建物は建てないですね。大きなものは必要としていないというのが、うちの立場です。

次の下の段になりますが、それでは何をしているかという、上高地のビジターセンターでは、例えばガイドサービスの提供とか、それから情報提供、ガイドウォークの開催といった、そういうむしろソフトな面のことを重視しています。そういったところで普及啓発活動をしていると。

僕もある植物が見たかったので、ビジターセンターに行きまして、職員に、「これ、今、咲いてないの。」と言ったら、「今、キャンプ場の向こう側のここにありますよ。」と教えてもらって、そんなことなかなか教えてくれる人いないんですけども、即座に教えてもらって見に行きました。そういう情報がすぐに出てくる場所がビジターセンターということです。それがなかなかできないのが現実なんですけど、上高地はよくやっていると思います。

焼岳の情報は、さっき申し上げたとおりなんですけど、上高地の近くには焼岳がございます。ただ残念ながら、恐縮なんですけど、焼岳の展示はほとんどなくて、タッチパネルのデータを見るやつで追っかけていくと出てくるぐらいしか、実はないそうなんです。先ほども申し上げた噴火情報の張り出し程度をやっていると。うちの責任というわけではなくて、気象庁さんのもの、松本市さんの作成された資料を張り出させていただいています。

そういうことを考えますと、現実問題としては、火山について手厚く情報提供するのであれば、現在、植物や動物が得意なスタッフが用意されているんですけども、今の状況はちょっと難しく、火山の専門家の確保が要るというようなことになってくるんじゃないかというふうに思います。

先ほどフィールドの話、ソフト面の話をしたときにも、ちょっと下のほうに書いてあるんですけど、あくまでビジターセンターはそういう施設なので、建物よりも、施設よりも、そこに入っている人間が大事なんです。お客商売なので、専門的な方がいて、でも専門ばかりでもいけなくて、ちゃんと対面でお客さんの相手ができる、必要なインフォメーションを与えられるような人材が必要だと。それがあれば、つまらない建物でも全然問題がないと思います。

これは、先ほどもあった有珠山の西山火口です。ここでも、その火口を見せるとかそういったことをやられているというのは、前回、ご報告があったんじゃないかと思います。その先鞭をつけるようなことを、以前やっておりました。

それで、前回ご報告があったので、私が今さら報告をするつもりは

全くないんですが、若干、ちょっとだけ付け加えさせていただくと、火山科学館と洞爺湖ビジターセンター、2つの建物がありまして、火山科学館のほうは町にやってもらっています。うちに土地を売ってもらったそのお金で町が建ててくれたんですけども。何でそういうことになったかという、やはり環境省ができることと、町ができることと違うので、環境省ができないことは町がやってくださいという形になっていまして、それでいろんな盛りだくさんな機能が入っているということをご承知おきください。周辺のトレイルなんかも整備してありますが、基本的には火山景観や火山現象といったものとか、森林回復状況を見てもらうものを整備しています。

あと、同じような施設としては九州に、この間の1回目にご報告されたところに環境省の施設がありまして、平成新山ネイチャーセンターというのがございます。これについても火砕流の跡をフィールドとして活用しながら、再生を見ていくといったようなコンセプトでつくられています。ここに建物がございます、周辺にフィールドがある。そんな感じのものでございます。

あともう1つですね、うちの事務所の仕事なんですが、ちょっと話が離れるんですが、立山室堂で有毒ガスが発生していて、そこは環境省の所管地がそこから発生しているので、そこに沿道とかございまして、お客さんが入っているものですから、うちではこんなことをやっているというご紹介をしたいと思います。

これ地図なんですけれども、この地図を見ていただくと、ダイダイ色の太線の谷でございます。12 ページですね。ダイダイ色のこのところに有毒ガスのセンサーを設けまして、室堂ターミナル等ですね、電光掲示板で有毒ガス情報をリアルタイムで提供するようなシステムを設けております。ビジターセンターじゃないんですね。もうそこまでいくと、もうリアルな、すぐの情報が必要なので、ビジターとかで提供するようなものではない。そういったものについてどうするかというのは、ビジターセンターで対応しかねるのかなと思って、ちょっとご説明をさせていただきました。

最後、御嶽山のビジターセンターに対するコンセプトなんですが、御嶽山は当然ですが噴火で影響を受けたこの場所、微々たるものなので、自然公園的には、やはり山麓の森林とか、高山帯の生態系が展示解説の中心になって、さらにそこに御嶽火山の歴史等を合わせて展示するような形になると思うんですね。防災面とか、被害者の方々の鎮魂とかメモリアルといったようなこととかについては、自然公園のビ

ジターセンターの趣旨ではないという、そういう理屈になってきます。ただ、県でされるわけですから、そこはどうなるかというのは、別に我々は、そこはだめよという話では決してないので、ちょっと誤解のないようお願いしたいんですが、基本的にはそういうものだという事です。

通例、先ほど見ていただいたように、登山者に対する情報提供って、一般的に行っているんですが、火山の噴火に対する情報提供を行うとすれば、1つ目としては、誰がその情報について責任を持つかという点が重要で、ですから、今のうちのジターセンターでは張り出ししかできていないということなんです。実は、防災面に責任のある主体が、火山噴火や防災について責任のある職員を確保して、それをきちんとやるということが必要になってきますね。今のジターセンターでは、なかなかできない。長野県内だけで3つの登山口、岐阜県で4つの登山口があるんですが、それら全てのところに情報提供を行わなければいけないというは、悩みになるんじゃないかなというふうに思いました。

最後の紙になりますけども、自然公園のジターセンターということをお前からお勉強されているようなんですが、それはそれで棚の上に置いておいて、まず、御嶽山の登山者に向けた危機管理のためのステーション、情報提供のためのステーションとは、必要なのは何なのかということをよくお考えになっていただいた上で、先ほど言っていたような人材を確保したり、ソフト面のことを考えて、さらにお客様に入ってもらうために自然公園のジターセンターとか、登山基地としての機能を付加していくというのが、考えていく上の筋なのかということがあります。

それから、先ほども申し上げたけれども、他の登山口でも、やっぱり情報提供は必須だろうと。ちょっと足が出ちゃいましたけど、私の話を終わらせていただきます。

・質疑応答

及川輝樹 委員

(国立研究開発法人産業技術総合研究所)

1点だけ、確認なんですけども。立山ですね、もともとガスの対策を行っていて、それはあくまでも歩道の管理、そこを通行する公園の利用者の安全確保の観点からなんでしょうか。

中山隆治 委員

(環境省長野自然環境

おっしゃるとおりですね、一部は通行止めにはしているんですが、そこしか通るところがないところがありまして、その管理はもともと

事務所所長)

環境省がやっています。

奥にある山小屋も潰れたりしそうなので、そこだけは頑張ってやっていると
いるところです。あくまで利用者の方々に、公園歩道の管理者として、
管理をしております。

(3)「各町村におけるビジターセンターの検討状況等について」

(木曾町、王滝村より)

外戸賢二 委員

(木曾町総務課長)

こんにちは。木曾町役場総務課長の外戸と申します。どうぞよろしく
お願いします。

私のほうでは防災全般の関係からの兼ね合いから、ビジターセンタ
ーをどのように描いていくのかということを少しお話しさせていただ
いて、古畑課長のほうからは、現在進めているセンターの進捗状況
等についてお話をさせていただきたいと思っております。

古畑浩二 委員

(木曾町観光交流課
長)

お疲れさまです。木曾町観光交流課長の古畑と申します。よろしく
お願いしたいと思います。

当町で進めております木曾町御嶽山ビジターセンター、仮称ですけ
れども、基本設計策定業務というものを本年度行うように、今、進め
ているところでございます。

申しわけございません。資料、特にございませんので、口頭のみ
の回答とさせていただきたいと思えます。

先ほど、中山所長さんのほうからビジターセンターについてのお
話、それから御嶽山に関するビジターセンターのお話もあったんです
が、どちらかと言いますと、当町で考えているのは、洞爺湖で言いま
すと火山防災センターの位置づけに近いのかなというふうに、今、感
じているところでございます。

経過といたしましては、平成 26 年 9 月の噴火災害以降、各種団体
の方々の意見、意向等を踏まえまして、火山に対する認識を住民、登
山者及び観光客に広く周知する必要があると考えて、ビジターセン
ター等の施設の整備を計画しているところでございます。

今回、初めて参加させていただいたんですが、県のほうで火山防災
あり方検討会、この会を開催しておりまして、ビジターセンターのあ
り方や火山マイスター制度等の仕組みづくりにつきまして検討を進
めていると聞いておりましたので、町といたしましては、その検討会
の報告を待った上で、その内容を踏まえまして、基本計画策定業務を
実施する予定でございました。

7月4日から6日、北海道有珠山の現地調査、県のほうで行われた調査に、当町と王滝村も同行させていただいて、洞爺湖ビジターセンターの視察、それから火山マイスター制度等について視察研修を行わせていただきました。その結果なんですけれども、やはり地域が火山と共生するため、または、登山者や観光客に火山に対する認識を周知させるためには、やはりビジターセンター等の施設の整備が重要だということを感じました。それよりも増して感じたことは、やはり火山マイスター等の人材育成の必要を強く感じてきた次第でございます。

現在、基本設計策定業務につきましては、まだこのあり方検討会からの報告が出されておられませんけれども、今年度の事業ということで、公募を10月下旬に行いまして、仕様書の中に火山防災あり方検討会の報告を踏まえる旨を記載して公募をしているという状況でございます。仕様書の主な内容になりますけれども、当町に御嶽山パトロール隊の方々がおりますので、その方々を中心に、県で検討しております火山マイスター制度を踏まえた人材育成機能の検討。それから噴火から2年が経過しておりますので、その経験を風化させないために、火山災害を経験された方々からの当時の状況、あるいは現在の心境等を関係者のご意向を踏まえた上で記録していく業務を入れております。

また、配置につきましては、登山者及び観光客をゾーンで仕切るなど、空間構成や動線を検討しまして、あわせて火山マイスターの詰め所等の配置も検討しているという状況でございます。場所につきましては、登山者あるいは観光客ということで、本来であれば分けてつくるのがベターかなという気もいたしておりますけれども、予算の関係等も踏まえまして、御嶽山の登り口であります御岳ロープウェイセンターハウスの中にビジターセンターを建設する予定で、今のところは話を進めております。

今後の日程になりますけれども、今月中旬に基本設計の参加者よりの提案書が提出されますので、まだ日程を定めておりませんが、プレゼンテーションを経て業者を決定したいというふうに考えております。また、決定した業者との打ち合わせにつきましては、本検討会の内容につきまして、十分議論をして中に盛り込んでいきたいというふうに考えております。

実施設計については来年度、30年度に施設整備を現在のところ予定しておりますが、今後についても、県及び関係自治体との情報交換、

あるいは連携等を踏まえて検討していきたいというふうに考えておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

外戸賢二 委員
(木曾町総務課長)

それでは、私のほうから、若干並行した業務を含めてお話を入れさせていただきますたいと思ひます。

ビジターセンターは平成 30 年ころに、御岳ロープウェイさんの施設を使ってという話がありましたが、並行して山岳関係のお話になりますけれども、今、二の池本館、いわゆる民間の施設でございましたけれども、町に譲渡していただいて、いわゆる建て直しで、施設宿泊も兼ねておりますけれども、情報の発信施設という捉え方を強めております。その施設の、先月解体工事が全て終了しまして、現在、基本設計に入っております。

平成 29 年度に、建設工事にかかっていきたいかなということでございますが、29 年度の秋口くらいまでには完成をみまして、実際の営業再開には平成 30 年度からという年度の捉え方をしております。御岳ロープウェイさんで設置するビジターセンターと、連携を密にして、情報発信に努めてまいりたいと。

お陰さまで木曾町の黒沢口の登山道には、各合目に山小屋がありますので、含めて、先ほど安全パトロール隊というお話も出ましたが、いかに人材を育成していくかが、大きな課題としてあります。その辺も捉えながら情報発信していきたいというのが、山岳エリアを捉えた状況でございます。

麓の防災体制も当然必要というようなこともありまして、木曾町は合併した町でございますので、旧三岳村役場、現在の三岳支所になるわけですが、そこが御嶽山の頂上を極めて肉眼で見えるところでございますので、その辺の支所と本庁の連携も密にしなが、いわゆる施設連携を密にしなが、防災対策の工事をかけていくということも捉え進めております。

現在、町では、本庁の建てかえ工事、平成 32 年度を目指しておりこれから本格的に事業の展開を進めてまいりますが、本庁舎の建てかえとあわせて、防災センター機能を高める捉え方をしておりますので、一体的な施設整備の中で、火山対策を講じてまいりたいというふうに考えております。

以上ですが、よろしくお願ひいたします。

田中洋 委員

王滝村村おこし推進課の田中と申します。私のほうからビジターセ

(王滝村村おこし推進
課地域推進担当係長)

ンターの基本計画策定業務に関しまして、ご説明をさせていただきたいと思います。

ビジターセンターをつくろうというところに関しましては、木曾町さんと同じような経過でビジターセンターの建設について検討されておりまして、今年度予算をつけて、基本計画をつくるというふうに決まっております。

当村の場合は、10月に既にプレゼンを終えまして、業者の選定まで終了しております。今現在は、建設候補地の選定に向けて、業者のほうで現地調査をしているという段階でございます。

当村のほうの基本計画策定の中身としますと、まず、建設場所の検討については、今回の基本計画はたたき台というような性格のものにしたいというふうに考えておりまして、2ヶ所、候補地を選定するような形で考えております。

もう1つ、大事な点としましては、情報伝達の部分で、いかに登山者に対してアプローチをしていけるか。その部分についての計画ですとか演出の検討、また、山岳ガイドの育成に関しまして、現在、この検討会のほうで検討されています火山マイスター制度を踏まえた山岳ガイドの育成機能についての検討、こちら辺のところが非常に重要な点として検討を、これからしていきたいというふうに考えております。

今回、中間報告の案も出されているわけですが、こういうものをベースにしながら検討を進めていきたいというふうに考えておりますし、これからもこのあり方検討会の状況等を踏まえながら行っていきたいと思っております。

先ほどちょっとお話がありました義務教育への対応という部分でございますけれども、今のところはなかなかそういう、木曾町さんのほうでも話ありましたが、なかなか人材の育成ということがやはり非常に難しい部分でもありますので、なかなか義務教育への対応ということは、今のところ、ちょっと困難かなというふうに考えておりますけれども、このマイスターの制度を踏まえながら、そちらのほうも検討をしていきたいというふうに考えております。

以上でございます。

・質疑応答

野池明登 座長
(長野県危機管理監兼

ありがとうございます。私が聞き漏らしたかもしれませんが、木曾町さん、義務教育との関わりについてコメントがありましたらお願い

危機管理部長) します。

外戸賢二 委員
(木曾町総務課長) やはり人材育成の中に、大人の教育、学習の場の学び舎も勿論なんです、子どものうちから、麓の御嶽山が、活火山であり、日常的な生活環境を通して学びの時間が必要だと思っております。

今年実施の、これは国交省との連携事業になりますが、火山砂防フォーラムという全国規模のイベントを10月に開催したわけですが、地元の小学生によります、火山で起きる泥流対策というような学びの学習会を学校の授業を通し、展開しております。

やはり、火山マイスターもそうですけれど、地域に学ぶ力をということになりますと、学校教育、非常に大切、重要なポイントだと思いますので、その辺、町の教育委員会も、また学校関係者と、そんな話で、時間がなかなか取れない、今日の学習授業計画もありますが、ぜひ実施をして、教育と人材育成に努めてまいりたいと思っております。

野池明登 座長
(長野県危機管理監兼
危機管理部長) ありがとうございます。この火山防災のあり方検討会は、どこで誰がいつビジターセンターをつくるということではなくて、望ましい姿、あるべき機能を検討するということで、今の、町、村からのお話を聞くと、この検討会の検討経過及び結果を取り入れて、活かしていただけるということですので、引き続き、この検討会での議論を深めていきたいと思っております。

何か、ご質問ございますでしょうか。

山岡耕春 委員
(名古屋大学教授、長
野県火山防災アドバイ
ザー) 小中教育の対応というところは、なかなか難しいかなというふうなご意見もあったんですが、1つだけちょっと聞かせていただきたいんですが。小中学校の先生というのは、全県でこう転勤されているというふうに理解してよろしいのでしょうか。

そうすると、例えば、木曾町、あるいは王滝村への赴任されてから、そこからよそへ赴任される間の期間ってどのくらいが平均ですか。

外戸賢二 委員
(木曾町総務課長) それぞれ教育の現場事情もあろうかと思いますが、大体3年間ぐらいですね。

山岡耕春 氏
(名古屋大学教授、長 何か自分の小学校のころを考えると、社会科の一番最初って、地域を知るというところから始めるので、そうすると先生がその地域のこ

野県火山防災アドバイザー)

とをどのくらい知ってるかということが一つの鍵になるかなと思って。そんな意識もあってですね、何年ぐらいいらっしゃるのかどうかという話をしようかと。

外戸賢二 委員
(木曾町総務課長)

先生もそうなのですが、やはり地元出身の先生というのは限られておりまして、県下の、いわゆる木曾以外のところから赴任されてるということでございます。

今回の木曾町の三岳小学校の学習もそうですが、御嶽山を知る先生をお呼びして、それを授業の中の一環と捉えて、先生も一緒に子どもたちと学んでいくと。また普段の授業の中でも、先生がまた子どもたちにどのようなアプローチができるかどうかは、期待のところだと思いますが、やり始めたところでございます。

中山隆治 委員
(環境省長野自然環境事務所長)

先ほどの話の中で、1つしなかったことが、し忘れていたことが、今、まさにお話の中であつたんですけど。

まず1つ目、ロープウェイの駅舎の中につくられるというのは、すごくいいと思うんですよ。ビジターセンターの位置を決めるときに、王滝村さんはまだ決められてないという話なんですけれども、とにかくお客さんから視認性があるって、わかってもらいましょうということなんです。一番理想的なのは、さっき言ったロープウェイの駅舎のような絶対通るところ。それで、例えば県内で言うと、小谷村の例えば梅池自然園のビジターセンターなんかは、ビジターセンターの中を通らないと中、自然園に入れなくなっていて、今ちょっと工事してるのでそうではないんですけども、必ず立ち寄ってもらえるような形になっています。お金払って入るので、そこ通らないといけないんですけども。そういった、その場所で決まってしまう。場所選びには非常に気をつけられたほうがいいと思います。

4. 検討事項

「長野県火山防災のあり方検討会中間報告書（案）について」

- ・資料説明「長野県火山防災のあり方検討会中間報告書（案）」（事務局より）
- ・意見交換

河野まゆ子 委員
(株式会社 JTB 総合
研究所主任研究員)

22 ページがわかりやすいので観光客を対象としたビジターセンターのあり方に関して気づいたことをお伝えさせていただきたいと思いますが、今回明確に土地の登山者と観光客という行動のパターンと、あと火山に対するそもそもの知識レベルが違うよというようなお話をこれまでの議論でされてきたことを踏まえて、このように分けていらっしゃるというふうに理解をしております。とは言え、観光客に対して、基本的このエリアに活火山があることを知ってもらうところからスタートをして情報を出すというふうに書いてございますけれども、ちょっと弱いかなというのが正直な感覚です。今回はつくるテキストの、と言いますか、性格上、御嶽に特化して一旦つくっていますが、観光客に関してはどこのビジターセンターでもいいんですけれども、どこかのビジターセンターに行くことで、火山の近くに遊びに行くということはどういうことかっていう全体のことを理解して、ほかの山に行くときにもきちんとこのときの経験が役に立つようになるべきであると個人的には考えてまして、なので全国のいろんなところの火山防災を踏まえたビジターセンターが、相互にそういう情報を出していくことが求められるのかなと思っております。この書き出しのところで、観光客は登山者に比べて噴火の危険性が想定される区域まで接近することは少ないというふうに言い切ってはいらっしゃいます。実際に、確かに噴石にやられるとか、そういう地域まで行くことは少ないかと思いますが、何か事の起こったときに避難エリアから外に出なければいけないとか、そういうことは確実にあり得る話でありますので、もう少し危機というか、自分の行動に関して理解できるぐらいまで情報がほしいだろうなということが1点と、22 ページの一番下に観光客に対する情報発信の内容と手段という表というか、ポンチ絵をつくっていらっしゃいますが、理解を促すの3番目に、噴火災害という負の側面もあることを理解してもらうというの、これが実は結構難しいことで、外部から来られた観光客に対してパネルでこういうことがありますよっていうのを出したときに、テレビの向こうの話のような気持ちで理解をされてしまうと意味がないことになってしまいます。自分の身に起こり得るところで、よそのこととして、こういう知識として理解をするというよりも、いつか自分に起こる可能性があるリスクとして理解するっていうような伝え方が必要なので、この書き方だとその裏の意味をとれない方々に対しては、ちょっとリスクを認知させるという意味の掲示にできるかどうかというところで、少し表現方の工夫が必要かなという

ところがあるので、現状のこの区分けの理解を促すの3番というのは、むしろ下の危険を認識させるのほうに意図としては近いのではないかと考えています。

例えばですけども、手段として、予算の関係とかいろいろあることを一旦全部横に置いてお話ししますが、観光の場面では、自分の身として体験するということのエンタメ体験として、よく最近だとVRが使われてまして、例えば遊びの話でしたら今、横須賀にある戦艦三笠に乗ってVRを見ると、戦艦大和に乗っているような風景が見られるというのをちょうど今展開しているような感じなんです。ビクターセンターとか、自分が山に近づいたら、そのときに噴火があったらどういふ風景があつて、案外遠いように見えるけど実は近いだとか、そういうふうな疑似体験装置とかも含めて理解するというので、難しいパネルだと読まないかもしれないけれども、もう少し身近に体験できるというようなどころまで理解をするきっかけを広げていくと、おもしろいのかなという気がいたします。一旦、以上です。

野池明登 座長
(長野県危機管理監兼
危機管理部長)

ちょうど22ページの観光客と登山者を分けて考えるという中の観光客についてご意見をいただきました。これにつきまして、他にご意見があれば、お願いいたします。

山岡耕春 委員
(名古屋大学教授)

多分関係あるところでお話ししますと、予算のことをさておきという話もありますが、多少それに関係すると、そうですね、御嶽に限ると、先日ちょっと外国からのお客さんを連れて行ったのですが、雨が降るとなかなか行くところもなく困ったなということもあるので、やっぱり少し雨の日を楽しめるっていうようなイメージを持っていたかと、地域振興の山になる気がします。

それから、何かこの辺の提供すべき情報についての記述が、かなり真面目に取り組んだ感じがするんですけども、もうちょっと柔らかくてもいいのかなと。柔らかくてもいいのかなと、僕ちょっとメモがわりに書いてあるんですが、ブラタモリの解説と書いてあるんですが、要するにその地域でここを見たらおもしろいとかですね、そういうものをいろんなところを示してもらって、そこを見ることである種の気づきがあつて、そうか、こういうところにも火山があることで、こういう地形ができるのか、あるいはこういう景勝地があるのか、そういうところに現実に気づいてもらうということが大事。あまり大上段に教えてやるというわけではなくて、さらっとおもしろいよって言っ

て、なるほどという、そういうプロセスもできるといいなというふうに思いました。

それから、今、河野さんが他の火山にも役立つ知識というところなので、何かその辺は、全国の火山にちょっと共通的なものがあるといような気がします。具体的に言うと、火山災害の種類って大体6つか、7つくらいなので、その基本的な知識を頭に入れていただくと、御嶽、そこでなくてもほかで役立つということがありますね。現状、大人になるとなかなか火山の勉強をしないし、火山地域以外からもお客さんたくさん来るので、そういう方々のリテラシーを上げるためには、上げるためにはというか、上げられるのは、本当にそこに行って学ぶしかない。恐らく現状ではないと思いますので、そういう役割も一部ちらっと出てくるといいかなと思いました。以上です。

杉本伸一 委員
(内閣府火山防災エキスパート)

情報発信のことで、実は 21 ページにビジターセンターでの情報発信、先ほど具体的な情報発信については、中山所長さんからありまして、一番最後に他の登山口でも噴火情報は必要なんだというようなことが書いてありますし、また 21 ページにも実は (5) にビジターセンター外での情報発信ということで、いろんな登山口でこういうことをすべきだ。ただし誰が責任持ってやるのか、定期的な情報の更新、メンテナンスをどうするかという問題はここに書かれています。実は、これ、今年だったと思いますけども、時事通信社が行った活火山の登山者のアンケートというのが新聞に出ていたんですけども、登山口でアンケートをとって、とったのは安達太良山と弥陀ヶ原と焼岳、劔岳ということになってはいますが、ここで活火山と知っているかどうかということを知ったら、知っている人が 88 人で、知らない人が 14 人。知っている人の 88 人の中で噴火警戒レベルが、今この山がどうなったかというのを知っている人は 33 人で、知らない人が 48 人。結局、御嶽山の噴火でかなり登山者に対して、自分たちでそういうことをちゃんとしなさいっていうのを、かなり PR されたと思うんですけども、それにしてもまだこのレベルなんです。しかも、登る前に最新の火山活動状況をインターネットなどで調べたかっていうと、確認した人が 31 人で、確認していない人が 57 人というような数字が実はあらわれています。御嶽山を契機にかなり登山者の方は、そういうことについて関心を持っているというふうに思われますけれども、まだしかしこのような状況にあるというのが現状なんです。そうしますと、やはり登山口でそういうもの、活火山であるか

どうか、あるいは今の噴火警戒レベルが何なのかというのをやはり張りつけるような、ここにあるボードみたいなものですね。実は、雲仙普賢岳は、登山口にちょっとした掲示板みたいなのがあって、そこにそういうのを掲示できるようなものがあります。そういう工夫もぜひ必要なのかなと。ここにありますように、それをどこへやるかというのは、それぞれ検討していく課題はあると思いますけれども、そういう情報はどうしても必要になってくるのではないかというふうに思います。

小川さゆり 委員
(南信州山岳ガイド協会
山岳ガイド)

今、お話があったように登山者の意識を変えるっていうのは、無理と言ってはおしまいなんですけど、とても難しいです。なので、事前に調べてくるのが一番いいのですけど、それを言ったら何年たってもちょっと難しいんで、ビジターセンターの中に登山案内所っていう、ちょっと名前を変えるとピンときやすいんで、登山案内所というのをつくれればいいのかと思います。上高地の入り口に、先ほどお話があったんですけど、登山案内所があるんですが、そこにいる方がとても感じのいい人で、上から言うわけでもなく、ちゃんとした近々の情報を教えてくれて、それでいて、いってらっしゃいみたいな感じで言ってくれて、時間内に帰って来たときには、行ってきましたと、こちらが声をかけたくるような、とてもいい方がいるんですが、そういった声かけというのが一番いいのかなと思います。難しいことじゃなくて、実際調べて行ってない人に対しては、今日の御嶽山の状況はどうだっていう、そういうことを伝えて、きっといい感じに伝えられれば、実際に登った方が今日はこうだったとか、そういう話をしてやっていくのが一番いいのかなと思います。結局は人とのつながりだと思います。文字ではなくて言葉かなと思います。なので、ビジターセンターで観光客にアピールするのももちろんいいですし、私自身もいろんな歴史とかはやっぱ知りたいなと思うんで。ですが、実際、今日登りに来た人に、それを見て登ってくれというのは恐らく無理だし、なかなか見ないので、登りに来た人たちには今日の情報をきちっと伝えて、時間があったら帰り見ていってくださいとか、そういうことを伝えられて、登山案内所という名前で、ぜひビジターセンターには登山者向けの近々の情報を伝えるものを、人材も難しいんですけど何とかできればいいのかなと思います。

及川輝樹 委員

今、人が非常に大事だというキーワードをいただいています、小川

(気象庁地震火山部火山課調査官)

さんのほうから。中山さんのほうからも主人公はあくまでも人材であって、建物はそのための存在、そこで活動している人が大事だというお話があって、まさにそのとおりだと思います。そのためには、人の人材育成というのか、あとのマイスターの話も絡めて重要だと思うのですが。そのことですね、多分ビジターセンターにこういうものをつくりなさいというだけじゃなくて、どういうふうにそういうものを伝えていけばいいのか。例えば、こういうコンテンツがあると説明しやすいとか、そういうものを整理するような事業というものを行ったほうがいいのではなどの提言みたいなものを掲げられればと考えております。

その1つの理由は、御嶽山の場合ですと、新しく火山防災に特化したような形のビジターセンターというものがつくられるでしょうけど、ほかの地域の火山ですと、今ある既存のビジターセンターにそういう活動をお願いする、できる範囲でお願いする形になると思います。そういうときにやっぱり現場の方たちが、興味を持ってやるにしても、そのとっかかりになるような、例えばこれを読めば最低限のところはわかるとか、説明するための資料とか、例えば火山の生い立ちとか何か教科書みたいな、長野県の火山の教科書、そういうのをパッと見るとわかる。そういうものがあると、より効果的な防災のいろんなことが、各ビジターセンターでも行ってもらえる。そういう事業の提案みたいなのを含めて、報告書に盛り込んだらどうかという提案をしたいと思います。

あともう1つは、33 ページのところで、ビジターセンターと地域振興をまとめてみますと、まさに新しくつくるビジターセンターに対する・・・しても、そこをコアにしてフィールドに出たり、いろんな地域の観光ですね。そこからいろいろつながって連鎖的にいろんなところに波及していくというのが、やはり新しく物事を起こす上で、地元としてもインセンティブが高いと思います。そういうところを考えながら設定していく、そのヒントになるようなところ、例えば山岡さんのほうからブラタモリ的なという言葉がありました。あれは地形をキーワードに、その案内をしていく。主人公を出すのはどうするのかという、その地域の特性はどんなのかってことも、まとめるようなことも考えていくのがよいかなと思います。

あと最後ですけれども、34 ページのその次のページのところで、下線を引いてますけど、観光目的で訪問する一般の登山者や観光に向けて発信する情報と警鐘のための情報は区別して考えるということが

書かれています。これはそうだと思います。ただ特に御嶽山の場合は非常に犠牲者の方が多かったので、何らかの鎮魂の施設の設置や、記憶の継承みたいなものというのは行わないといけないと思います。そのためにも、例えば噴火体験のアーカイブスとか、鎮魂メモリアルセンターなどです。ビジターセンターとしてそれらを取り込むのではなくて、どういう形で施設を作り役割分担を考えていくのかということに関しても配備すべきではないかと考えていて、中間取りまとめには取り込めないまでも、最終的な取りまとめまでは、その方向で今後論議していければというふうに思っています。

吉本充宏 委員
(山梨県富士山科学研究所主任研究員)

今、及川先生とか、それから中山先生とかがおっしゃったのとかぶるんですけども、あと先ほどの河野先生の話で災害の負の側面も、でも打ち出さなければいけないということです。恐らく、ただ観光客に負の側面を強調し過ぎると回避されがちになるんで、いかに楽しく負の遺産を教えるかというのと、先ほどプラタモリというのもありましたけれども、まず興味を引くことを持ってきた裏側には、これは実は火山の噴火でこういうふうに来たんだよというふうな、いきなりこんなものが 300 キロで飛んで来たってことを教えてしまうと、それはもう恐くて来ないと思うんです。でもこういうおもしろい岩があって、これはこういう性質があって、その上にはきれいな花が咲いてますよと。実は、でもこういう地形ができたのは、その噴火の影響でというふうに、最初は楽しい話題から入って、そこには実は裏には火山の脅威がありますよという形で物事を持っていかないと、一般の観光客の人たちが、恐らく最初から情報を見ない可能性があるんですよ。負の側面ばかりを書いてしまうと、恐らくそこは素通りしてしまう。ただ一步、きっかけはどこにあるかっていうことを皆さん、多分その地域で探して、ここはこういうおもしろものがあるって、それは実は、でも裏を返すってということじゃないかと思うんですよね。例えば、雲仙のところでも眉山の崩壊でいっぱい島があるんですけども、実はこれは山体が崩れて、そういう風光明媚な島がいっぱいできることによって、それが観光名所になった。観光名所になった理由はっていう、そういったところから入るとかですね、そういった負の側面の見せ方というのは、かなり工夫しなければならないかなというふうに私自身は思います。

それが実は、これは杉本先生が一番詳しいと思うんですけど、ジオパークの手法はまさにそこだと思うんですけども、プラタモリ的

手法とか、ジオパーク的手法というものをよく皆さんで。御嶽山とか、その地域地域のストーリーというのは、多分必ずあると思うんです。そこをまずしっかり打ち出して、それで及川さんが言ったように何を発信したいかというところをちゃんとコンセプトとして持って、ビクターセンターに盛っていくということが、そこには中山先生が言うように、人、語り部ということがものすごく重要になってくるんだろうと。それは楽しく、おもしろくしゃべれる人っていうのが、やっぱり大事だということですね。そのためには、豊富な知識がないとうんちくってしゃべれないんじゃないかと思います。なので、火山に特化しないで植物の人、動物の人、それから地形の人、火山の人、そういったいろんな多種多様のスペシャリストが集まって、そういったものをつくっていく中でストーリーを組んでいく。そういった火山だけじゃなくて、切り口は動物でも、なぜこの動物がここに住みついたか、それが実は火山だったとかっていうことでもいいと思うんですよね。そういった興味を引くものから恐いことへというほうの方向性だけは、ちゃんと持っていたほうがいいんじゃないかなというふうに、皆さんのお話を聞いてても思いました。

秦康範 委員
(山梨大学工学部土木
環境工学科准教授)

細かいところではなくて、割と大きなところで1点。多分議論が必要なところかもしれないですが、登山者に向けた情報発信なんですけれども、御嶽山でやっぱり確認されたことというのは、登山者の多くが活火山であることを十分認識してなかった点ですね。噴火に対して適切な退避行動がとれなかった人も少なくなかった、そういうことが問題になっていると思いますので、情報発信が特に重要だという点はまだ、そのとおりで思っています。一方で、観光客はそこまでないと思うんですが、登山者に対してですね、やっぱり登山者自身が持つべき責任と言いますか、そういった部分はあると思っていまして、小川委員はよくおっしゃられてる、登山は自己責任だという言葉もございますが、やはり登山者自身がそういう情報に敏感にならなきゃいけないし、3,000メートル級の山に登るということであれば、火山だけではなくて、滑落等、ほかのリスクも当然あるわけで、やはりある種のリスクがあるということは、わかって登山をすべきだと。その部分は、地元自治体であるとか、県であるとか、情報を提供する側だけの議論だとやはり十分ではなくてですね。やはり登山者自身のあり方についても、踏み込んだ記述があってもいいのではという点を指摘させていただきたいと思います。

防災についてこういうリスクとのつきあい方というのを考えたときに、我が国というのは行政が中心にやるってということが災害対策基本法の中でも責務として規定されていて、どうしてもやる側とされる側って関係性ができていて、近年これが非常に問題であるというふうに防災研究者の多くが指摘するような時代に入っています。一方、例えば米国の例を見るとですね、観光地であっても危険な場所には、**Enter at your own risk** という看板が立っています。入るなどは書いてないんでよね。入って構わないと。ただあなたの自己責任ですよということが書いてあってですね。ですから、危険があることは知らせる必要があるし、義務があるわけですけども、入るかどうかは、そのリスクをとった上で楽しむかどうかはユーザーに委ねられているわけですね。ですから、日本も危険だから入るなど、絶対安全を保障するような情報発信の仕方というのは、やはりちょっともうそろそろ卒業しなきゃいけない時期に来ているんですね。やはり一定のリスクを踏まえた上で、それを楽しむと言いますか、そういった部分を享受していくって関係性が非常に重要になってくるのではないかということで、その点をちょっと指摘させていただきたいと思います。以上です。

野池明登 座長
(長野県危機管理監兼
危機管理部長)

これまでも、今の関連する内容で、小川委員からご発言をいただいた機会もあったかなと思うのですが、小川委員さんいかがでしょうか。

小川さゆり 委員
(南信州山岳ガイド協
会山岳ガイド)

自己責任ですか。

野池明登 座長
(長野県危機管理監兼
危機管理部長)

と言いますか、どういように登山者に対して、その辺のところを訴えるのがいいのか、というような視点で。

小川さゆり 委員
(南信州山岳ガイド協
会山岳ガイド)

自己責任というのは、家に帰ってきて初めて成立する言葉なんですね。山に登るのは自己責任でも、事故が起きたら自己責任ではないんですね。誰かが救助に行った時点で、もうそれは自己責任じゃないってことです。自由と自己責任というのは背中合わせの言葉で、とても使うのが難しいんですけど。私はもちろん登山はリスクを含めた

自己責任でやっているからおもしろいと思います。それを今の登山者がリスクを理解しているとは思えないのが現状だと思います。あの日御嶽に登っていた人たちは、ハイキングの延長のような登山者が多かったように感じました。もちろんそういう方が亡くなったとは思っていません。御嶽山の登山口に登山は自己責任ですってもし書けば、また何らかの反発はあると思います。やはり御嶽山に限っては災害指定をした時点で、自己責任という言葉はもう通用しないんですね。ご遺族の人にしてみれば、その言葉は全く通用しない言葉だということふうにも言われてる言葉なので、難しいですね。ただ、山に登るというのは、やっぱり好きな山、自分で選べるわけなんで、それには責任の伴わない自由っていうのは通用しない場所だと思います、山は。それをどれだけ登山者に自覚してもらい、覚悟をもって山に踏み込んでもらうかっていうのが、とても大事だと思うのですが、それを自覚してもらう決定的なことは、難しいですね。登山者の意識は、登山者自身でしか身に着けようがないものなので。済みません、うまく説明できずに。

野池明登 座長
(長野県危機管理監兼
危機管理部長)

自己責任というストレートなことではなくてですね、いかに有効な意識づけをできるかという視点では整理できると思いますので、いろいろ努力をしてみたいと思っています。

小川さゆり 委員
(南信州山岳ガイド協
会山岳ガイド)

遠回しにっていうか、ストレートには書かなくても、遠回しにしてたら絶対届かない言葉でもありますね。なので、その核心をつかなければ意味がないし、それをつきすぎるのも難しいっていうところで、ぜひそこをちょっとうまいこと書いていただければと思います。

吉本充宏 委員
(山梨県富士山科学研究
所主任研究員)

今、小川さんが言ったことは、多分2つの側面から考えていかなければいけないんですけど、もう今、登山者の方々というのは、やはりなかなか、今から自己責任をと言ったりとかですね、そういったことはなかなか難しいと思うので、やはり登山口のところで的確な情報発信等、こういったところは危険ですよ、こういったところは危険じゃないですよというようなちゃんとした情報発信をしていく中で、あくまでも、それでもこうやって火口の近くに行くんですよというリスクはちゃんと伝えるべきだと思うんですね。

一方で秦先生がおっしゃったことでも、もう今、日本はもうちょっとそういった情報の発信の仕方を変えていかなければいけないと思うんですが、やはり日本というのは、天気もそうですけども、スマホ

を見れば降水確率がかなりの確率でわかって、何分後に雨が降るとかっていうところまでわかっている状態になってしまうと、なかなか自分で情報を、喫緊の情報はとりにいきますけれども、一生懸命苦勞して勉強して、その情報までたどり着くっていうことは多分しないと思うんですね。そこを実はネガティブに考えていてもしようがないので、逆に小学校とか中学校とかそういうところの教育の中で、自分たちがどういうところに住んでいて、どういうリスクがあるかで、例えば、そういうことを学ぶということは別に登山とかに関係なくて、自分たちが住む家を買うときに、自分がどういうところに住むのか、それはリスクと、それから自分が求めているものの、自分の要求とリスクとを勘案してどちらが上回るから自分が買いたいと思うかというところに来なきゃいけないんですけど、実は今、やっぱりそういった意識が欠けているので、それはもう少し国民的な目線で、義務教育の中とかそういったところで、自分がどれぐらいのリスクを持って、自分がどれぐらいのものがほしいかっていう、そういうそこが考えられる人間をつかっていかなければ、書くだけで自分の責任で入ってくださいというような掲示はなかなかできないんじゃないかというふうに思います。だから、やはりちょっと教育のところはどうしてもなってしまうと思うんですけど、そこはこれとは別に何らかの形で少し、やはりそういうアドベンチャーとか、そういったものが町の振興とかになるところであれば、富士山も全く同じだと思うんですね。そのリスクで、富士山の場合はどちらかという、火山のリスクよりも登山のときの落石とかですね、人為落石のリスクとか、そういったことが多いんですけど、そういったものをやはり教えていくということを考えたとき、やはり同じことでなかなかそれは伝わらない、教えられない。だからやっぱり今の地元の小学校のところとかで講演するときにはですね、富士山だから火山を勉強するのではなくて、あなたたちはどっかへ行ったら津波に遭う地域に住むかもしれないし、どこに住むかもしれないから自然災害全般は勉強しなければいけないということは、常に伝えるようにしていますけれども。そういった火山だから火山のことだけっていうわけではなくて、火山も複合災害なので、台風が来るときに火山のところに行くと、火山の災害ではなくて台風の影響、そういったものがあるんですね。山っていうのは、そういう複合的に災害が起こるところであるということは、もっと根っこのところで教育をやっぱり実施していくことは必要なというふうに思います。これはちょっとビジターセンターとは別になってしまうんです

けど、そこもある程度議論していかないと。このビジターセンターだけではなかなか補えないですね。

杉本伸一 委員
(内閣府火山防災エキスパート)

今、吉本さんからお話があったように、先ほどもあったように、まさしく地球の成り立ちなり地域の成り立ちを学ぶことによって、あるいはその地域がどうやってできてきたかということによって、間接的に過去の災害を学んでいく。そういうことを実はジオパークでやろうとして、そういうことでやっているわけです。防災と言わない防災ということをやっていますけども、まさしく短期的で見たときと長期で見たときって全く違うわけですね。例えば火山にしても、例えば火砕流、土石流というのは、そのとき大きな被害を与えるわけですけども、長期的に見ると結局平らな台地をつくってくれているわけです。それは地すべりにしてもそうですね。短期的に見ると災害なんだけれども、長期的に見ると実はそれは恩恵に変わってくるというところもあって、そういう中からその地域の成り立ちを学ぶことによって過去の災害を知る、あるいはよその地域の災害を知る、それを自分たちがそこで、今度そういうことになったときにどうしたらいいのかということを学んでいこうということで、特に日本のジオパークというのは、変動帯にある日本の中でいろんな災害が起きていますから、そういうところをとにかくジオパークの中で取り組んでいこうというのが大きな特徴なんだろうなというふうに思っています。

実は 20 ページに、登山者への効果的な情報発信のところの上、(1)のところの下段落にそのことが実は書いてあるんですけども、これは、地球は地域全体の視点を踏まえて、ジオストーリーがどうかという。これは必ずしも登山者への効果的な情報発信だけではなくて、これは観光客を対象とした情報発信にも通用するものだと思いますので、この点については、第3章のほうでもぜひこの部分を書き加えてほしいなというふうに思います。

野池明登 座長
(長野県危機管理監
兼危機管理部長)

ありがとうございました。

もう既にマイスターの方にも話題が重複をしてきましたので、以後、マイスターのことも結構ですので、ご意見をいただければと思います。

河野まゆ子 委員
(株式会社 JTB 総合)

吉本先生のお話を聞いていて思ったんですけども、普段観光の現場にいて、防災と関係ない観光地に来る観光客の動態というのも見えてい

研究所主任研究員)

るんですが、例えば、世界遺産に認定されたどこどこに行きますと言って、自分で主体的に旅行を計画して、あるいはツアーに申し込んで、世界遺産になったから行こうと言って来た人が、必ずしも勉強してきているとは限りません。じゃあ、その観光地に行って見て終わって、あなた何か所回ったのって言ったら、もう忘れてるんですよ。だから、興味があってその場所に行く人でさえ、実はその興味というのは、こう言っては非常に失礼ではあるんですが、実は大したことないんですよ。知りたいし、そこでへえって思ってみただけけれども、へえって思ったことで満足をしていて、実際にその知識が頭に入ったかどうかというのは、実はまた別問題というのが観光客の難しいところですよ。

今回の議論のテーマというところで、ビジターセンターがキーとなっていて、そこに行かないと、そこを通らないとその先に進めない場所に設置するというのは本当に鉄則だと思っていますが、そこで可能な限り情報を嫌でも触れさせて、少なくとも、ちょっとでもいいから知ってもらおうというのが1つ必要ですが、先ほどの吉本先生の、結局人として人材を育てていく、基礎知識としてどうやって防災のことをすり込むかということが非常に重要だというのはまさにおっしゃるとおりなんです。もう1つ多分抜けている視点としては、最近のファッションとしての登山とか、デートとしての観光とか、その場所に行くということが観光の主目的ではない人たちが山ほどいるんですね。登山が最近、ファッションが女の子のお洋服が恥ずかしくないふうになり、かわいくなってきたから山ガールが生まれて、どこか景勝地に行くのに紅葉がきれいだから、親と行くより彼氏と行くほうが楽しいから行くのであって、その「場所」に主眼を置いて選択しているとは限らないというのが観光客の忘れてはいけない特徴です。なので、その土地に行ったからその土地を理解したいとそもそも思っているかどうかということが盲点で、そういうことを考えると、その現場で伝えるということは、マイスターの機能も含めて非常に重要ですが、現場で楽しくお話ししてくれる人がいるから、その人の話をおもしろいから聞くかといったら、彼氏との大事な時間を邪魔する人とかみなさない人たちも大勢いるわけで、そういう人たちは話を聞かないです、どれだけ楽しくても。そういう人が一定程度のかかなりの割合で、この観光客の中には含まれているということをまず大前提にさせていただきたく、その人たちには、人がどれだけきちんと楽しくわかりやすく説明しても届かない人がいるという前提に立って、そういう

人たちにはどういうふうに情報を少しでも届けるかということが、今回の議論の範疇からは外れてくるかもしれないですけども、吉本さんのおっしゃるような人材育成というところもそうですし、あるいはファッションを仕掛ける側の雑誌かもしれないし、旅行会社かもしれないし、広告会社かもしれないし、そういう人たちとのタイアップをして山ガールを推していく中でそういう情報をいかに入れていくかという、情報の川上をいろんな分野で押さえていくということは、視点としては今回のものをつくる背景としては不可欠だと思います。

及川輝樹 委員
(気象庁地震火山部火山課調査官)

河野さんの話を聞いて、ちょっと別のことをしゃべろうと思ったんですけど、1点思いついたことが。あるヘルメット会社が最近、山ガール向けのヘルメットを売り出したんです。非常にファッションナブルで帽子とセット、その売りの文句の1つが、これをかぶっていれば火山でも安全です、とここに書いてあるんです。そういうファッションを仕掛ける側、商売になるならそういった方面も取り込める。そういうのはどんどん防災に取り込んでいったほうがいいと思います。

しゃべりたかったのはそちらではなくて、小川さんは自己責任の話やっていたけども、登山は当然自己責任ですが、世の中多くのことも自己責任なんです。けれども、登山は危険な行為をしに行くのですから、特に自己責任である面が強いと思います。結局、山に登って危険に遭うというのは火山に限らずいろんなことがあって、遭難対策と結局根が一緒のことが多い、いろいろと。

遭難対策で非常に効率的な方法がないというのは、長野県の方たちもご承知だと思いますが、非常に最近死者が多いですよ。警報が出されても、でもなかなか減らない。遭難の原因の中に火山も入れなきゃいけないということを認知させるというのが非常に重要な提案だと思います。遭難対策をやっておられる方は、強い覚悟みたいなものを持っております。そのときに、彼らもじゃあやってくださいと言っても、そうは言っても火山のこと知らないよというのがほとんどなので、先ほど説明したように、例えばそういう人たち向けの、じゃあどういふことを学ばばいいかというテキストみたいなもの、そういうものをビジターセンターとかの整備やマイスターの整備とあわせて、マイスターのカリキュラムの中に組み込むような教科書という意味で整備していくことが結構重要じゃないかと感じております。以上です。

中山隆治 委員
(環境省長野自然環境
事務所長)

マイスターの話になったので手を挙げたんですけど。先ほど話をした有珠山の話ですけど、やはりあそこももともとマイスターの制度の、一番最初のころの話を僕は見ていたわけですね。そのころやはり、もともとずっと有珠山を見続けてきた岡田先生という火山学者の先生がいらして、観測所が北大のがあってそこにいらして、ずっとその方が見られてきて、噴火自体を具体的に予知をされて、避難してということがあったんですけども。その先生がやはり、専門性とそして精神的にも基軸になってボランティアが育っていった歴史があるわけですね。やはりマイスター、ボランティアとしてそういうことを育てていくためには、やはり基軸になるコーディネーターというのが非常に重要だと思います。岡田先生みたいに偉くなくてもいいんですけども、やっぱり中心になっていくコーディネーターは非常に重要だと指摘させていただきたいと思います。

ビジターセンターの話に戻ると、実は我々もビジターセンターを中心にパークボランティアの養成というのをやっているんですね。ビジターセンターの職員や環境省の職員がコーディネーター役をやってはいるんですけども、そういった部分というのは実は別々の話ではなくて移設不可能な話だと思っていただきたいと思います。

実は管内のビジターセンターで、鹿沢というところにビジターセンターがあるんですけども、そのビジターセンターにボランティアの方々が宿泊するためのバックヤードを用意してあります。大概どこかのビジターにもあるんですけども。きちんと別棟で建物を用意してたりするんです。全国から、関東各地から来られるので、そういう利便を施設として担保しながらやっている。つまり、マイスターも実はソフト面だけでなくハード面もあるということです。そのボランティアの拠点がビジターセンターになっている。つまり、バックヤードであり、そして拠点であるものがビジターセンターです。結局さっきの話に戻ってきちゃうということです。そういうわけで、そういった機能をきちんとビジターセンターに持たせる、そしてやはりその人にそういった機能を担わせることが非常に重要なことだと思います。以上です。

野池明登 座長
(長野県危機管理監
兼危機管理部長)

ありがとうございます。マイスターにも段々言及されてきましたが、いかがでしょうか。

中山隆治 委員
(環境省長野自然環境
事務所長)

もう1個いいですか。1つ忘れていたんですけど。もう1つはさっき杉本さんがちょっとお話しされていたんですけど、私の役人としての信条ですけども、例えばマイスターの制度とかビジターセンターとかがあっていうのでなくて、政策ってある程度パッケージ化して打ち出していかなきゃいけないですよ。実は、それがこの世界でいうとジオパークだと思うんです。

さっきから教育の話も出ていますが、火山防災教育というのは、僕は相反するものを2つ入れているんじゃないかと思うんです。火山と自然を学ぶのと防災教育というのは実は真逆な点があって、これは吉本さんの話の中にもあったんですけど、負の側面とプラスの側面両方一遍にやるわけですよ。そこをきちんと分けて考えながら、そしてそれを組み合わせて考えていく、その中心になってくるビジターセンターがあって、そしてマイスターの制度があるといったものを、やっぱりパッケージにするには、本当にジオパークが非常に重要で、私は今、浅間北麓のジオパークにも絡ませてもらったり、そもそも管内に幾つもあるんですけども、そういうことをやっているんですが、やはり御嶽の場合は、多数の死者の方がいらっしゃるということで、亡くなっているということで、なかなか観光チックなことを打ち出しづらいという側面はあるんですけども、そこはさりとて、やはりある程度パッケージ化して打ち出していくのがいいんじゃないのかなというふうに思います。

外戸賢二 委員
(木曾町総務課長)

いろいろと教えていただきたいんですけど。町のほうで先ほどビジターセンターの設置、いわゆるハードなお話をさせていただきましたが、やはり町長も課題視しているのは、いくら整備してもそこでも人がいなければ何の意味もないと。いわゆる人材育成、人材確保というのを非常に心配をしておりますし、それが整っていなければビジターセンターのいろんな情報発信もなかなか難しいだろうという思いが、私たち職員もございます。

ビジターセンターが平成30年ころの完成を目標に今進めておりますが、並行して人材育成等確保して、そのあり方も検討していきたいと。先ほどから出ている学校教育もしかりなんですけれども。やはり全体像が見えていく中で、その中でもビジターセンターがあって発信基地がありますよという、地域発信の場を捉え方としてくると、ジオパーク構想という話も私の頭の中には少し入っております。そういう全体的な捉えの中で地域の人たちを風化させない教育としての学

びの場も必要だと思いますし、それぞれが連携して進んでいかないと、いうところが非常に時間のかかる悩みがあって、また田舎の地であるがゆえに、限られた人しかいないですけれど、木曾町の安全パトロール隊の構成員は 20 名で、県外の方も数名入っておられます。それらの方々は、山小屋の従業員の方々も、経験者としてバックアップをいただいているということで、週末に少しふるさとに帰ってきてもお手伝いに来るといふ方々もいらっしゃるんですけど、そんな形で今、何とか現場のほうで人の姿というのには来るんですけど、いかに人材育成をしていくか、確保していくかということ、少しご意見、ご助言をいただきたいんですが。

野池明登 座長
(長野県危機管理監
兼危機管理部長)

それでは、委員の皆さんから、今、外戸さんからお話がありました人材育成につきまして、ご助言ありましたらぜひお願いいたします。

秦康範 委員
(山梨大学工学部土木
環境工学科准教授)

さっき吉本さんからあったと思うんですが、やはり既に何かしらなりわいとしても活動されている方が前提だと思います。普段活動されていない人がいきなりマイスターになって活動し始めるというよりは、既に登山のガイドであるとか山小屋の人であるとか、ロープウェイの従業員であるとかですね、何かしらもう登山者と関わりを持っていらっしゃる方に火山の知識を持っていただくと。ですから、火山防災教育をやるために、ある種の新たな何か職種ができるというわけではないはずなので、やはり既存の、もう既に活動されている方にまずは火山の知識を持っていただくところからスタートし始めないと、なかなか動き出さないんじゃないかなと。まずはそういうモデルが動き始めてからじゃないかなというふうに認識しています。

研修制度というふうに、そういう教育の機会をどうやってつくるかという、町単独だとやっぱり難しいということになれば、ある程度規模をやっぱりスケール感がないと、研修もなかなか実際は難しいと。講師を呼ぶにしてもコストの問題も出てきますので、そこは県とも連携しながら、研修するような仕組みをどんどんつくっていくことだと思います。

杉本伸一 委員
(内閣府火山防災エキ)

マイスターとはちょっと違いますけども、ジオパークで今、やはりジオガイドという、どうやって育てていくかということ、日本全

スパート)

国のジオパークがいろいろ悩んでいるところなんですけども。例えば三陸で言いますと、震災の語り部さんであるとか、ネイチャーガイドをやっていた人とか、ジオとは全く関係ないんだけど、実際にやっぱりそういうことをやっていた人を集めていろいろとお話をしながらジオのことについても興味を持ってもらえる人をジオのガイドとして育てていく。もう1つ、その中でさらに狙っているのは、ジオガイドとして活躍してもらうことが、逆に言うと防災についてもいろんなことを地域に伝えてもらえるし、いざとなったときには地域の防災のリーダーになってほしい、そこまでぜひ持っていければなというふうな、そんな考えは持っています。ですから、そういう形で、実際に地域でいろいろ活動している人たちを集めてジオの話をして、それに興味を持ってもらえる人を実は育てていっているというのが今の現実です。

吉本充宏 委員
(山梨県富士山科学研究所主任研究員)

私も御嶽の研究を噴火後させていただいて、外戸さんにもお世話になっていますが、今パトロール隊の方々も私も面識のある方が何人かいらして、やはり非常に御嶽のことに詳しいという印象がやっぱり強いので、木曾町さんの場合は、やはりパトロール隊の方々とタイアップして、その中にやはり火山の知識というものを持っていただく。それだけでは多分なかなかできないので、例えば、信州大学さんに教育部とかもありますので、そういった学生さんとタイアップして、どういった次世代の人間をつくっていくかというところを踏まえて、あえてジオパークをするかどうかは抜きにしますけれども、後の人材育成で、御嶽で何かをしてみたいというような学生を取り込んできて、その人たちも含めて研修会をやっていく中で知識をつけていって、そういった中にはいろんな、先ほどもちょっと言いましたけれども、火山だけではなくて、やはり植物とか動物とか、御嶽全体が魅力的になるような方向に持っていかれるのが、僕はいんじゃないかなあと思います。

もちろんジオパークという手法はすばらしいと思いますが、あえてジオパークだけにならなくても全体。実は有珠もですね、ジオパークになる前はエコミュージアム構想というのがもともと発端としてありまして、有珠山全体をそういうフィールドミュージアムというふうにつくろうと、それが発展した形がジオパークなんです。なので、コンテンツ集めとか人材育成というのは、もともとジオパークが起ってからしたわけではなかったもので、そういった魅力を磨いて、それ

が例えばガイドさんとかのなりわいの1つの武器になるように持っていく。その中のいい形が防災マイスターみたいな形になっていくのが1つのいい方向かなというふうに思います。

中山隆治 委員
(環境省長野自然環境
事務所長)

有珠山の場合は、もう噴火して3カ月後くらいにはもうボランティアの方いらっしゃいました。先ほどお話しした岡田先生が中心になってもう集めちゃったんですね。もう、とりあえず始めちゃうところから始められた。その辺の噴火は終わってしまっているの、安全だということ、近所の人たちとかいろんな人たちが入れられたりですね。

済みません、ちょっと割って入っちゃったんですけど、さっきパークボランティアの話をしたんですけど、県外の方がすごく多いんですよ。上高地なんかは半分以上というか、大半が県外の方なんで、先ほど話のあった山小屋の方とかそういうような方を核にしながら、上手に県外の方を取り込んでいくというのが大事じゃないかと思えます。

及川輝樹 委員
(気象庁地震火山部火
山課調査官)

吉本さんの話とちょっとかぶるんですけども、吉本さんはジオパークじゃなくてもという話をおっしゃいましたが、ジオパークにするかどうかは別として、先ほど中山さんのパッケージで考えるときにジオパークの手法というのは非常に有効なんです。ですから、防災と地域の自然の資源を生かしたという意味で使うジオストーリーをつかって、そこの中でどういう教育を、どういうスキルをガイドとかマイスターの方に身につけてほしいかということを練り込むというのは非常に重要な作業なので、そこはぜひやっていただきたいと思えます。

そこで、多分いろんな分野で、例えば、歴史とか自然、自然現象の動植物とか、講師の方がいると思うんですけど、そういう方は県内にたくさん人材がいます。木曽地方だけでも、例えば林業大学校があったり、あと谷は違いますけど、木曽地方じゃないですけど隣の伊那谷信州大学の農学部もあります。・・・使っていますよね。高校の先生でも詳しい方いるでしょう。そういう地域の人たちをうまく使って講師もしてもらって、その人たちを巻き込んでいくという形が一番いいと私は思えます。

小川さゆり 委員
(南信州山岳ガイド協
会山岳ガイド)

御嶽に限っては、生還者の人をぜひ入れていただきたいなと思えます。しゃべれない方も多いんですが、やはり2年たって自分の経験をしゃべりたいという方も実際にいるので、ぜひそういう方に話してもら

って、そういう方というのは怖さだけではなくて、山のいいところも必ず話せるはずなので、さっき言ったように、怖いところといいところというのは、いいところのほうが多分多いと思うんですね。噴火さえしなければ火山はいいところなので。何かそういったところを、いいところプラスそういったところを生還者の人をうまく使ってもらって、言葉は悪いんですけど、やっていただければいいかなと思います。

野池明登 座長
(長野県危機管理監
兼危機管理部長)

人材育成について、他にいかがでしょうか。よろしいですか。

私、この前の火山フォーラムのお話を聞いてですね、人づくり、人材育成というと、とかく100年の計とか言われてしまうのですが、パネリストの皆さんのお話を聞いてもですね、短期的には育成というよりも発掘で、発掘に値する人はたくさん木曽地域にはいるなあという感想を持ちました。

それともう1つはやはり、アスリートと同じで、ピークの人材を育てるには裾野が広くなければいけないので、その裾野を広げるために、次の世代を担う子どもたちにアプローチするという話は、大事なかと改めて思いました。ありがとうございます。

段々時間も少なくなってきましたが、続けてご発言があれば、お願いします。

中山隆治 委員
(環境省長野自然環境
事務所長)

事務的な話なんですけど、1つボランティア組織を育てるのは心配事があって、先ほど自己責任という言葉がいっぱい出てきたじゃないですか。そのときにマイスターとかいろんなボランティアの方々が発動するとき、その人たちにも瑕疵が発生する可能性が非常に高いんですね。そこをどうやってフォローするのかというのをきちんと考えていく必要があるのかなというのは思います。そういう瑕疵が発生しないような形でいろんな研修とかをやらなくちゃいけないですし、保険とかそういったものを整備したりだとか、そういったことはきちんと、事務的な話ではあるんですけどきちんとやってもらわなきゃいけない。

屋久島の、ちょっとボランティアではないですけど、プロのガイド、組合をつくるようなことがあって、そのときには、やはり瑕疵の責任の保険をしっかりとすること。その保険を発動させないためには、何をということで、連絡は必ずできるようにトランシーバーを持ってみんなまで連絡し合う。そして、何か山の中であつたときも連絡をしながら

共同で対処するような体制をつくる。それから、対処できるように事前に講習を受けるとか、そういったことを組み合わせてやっていました。最初はそこまでいかないのかもしれないんですけども、やはり瑕疵の問題は必ずついて回るので、ボランティアを守るという意味からも注意していただければまたいいと思います。

杉本伸一 委員
(内閣府火山防災エキスパート)

このマイスター制度というのは本当に素晴らしいもので、ぜひこういうものが需要だというのは、本当に大事だなというのはわかります。ただ、実はちょっと私、気になっているのは、有珠山でこのマイスター制度というのがすごく有名になって、いろんな地域で有珠山のマイスターというのはあまりにも有名になりすぎて、このマイスターという言葉を使うこと自体が、どうもそれに引きずられるんじゃないか、引っ張られるんじゃないかというような、ちょっと懸念を持っています。制度自体とすると、こういう制度なんですけども、若干やっぱり有珠山のマイスターとは、ここでやるマイスターは若干違ってくると思うんですね、中身も。そうしたときに、やはり何かほかに名称がないのかなっていうことを、皆さんでちょっと1回考えていただければなというふうに思います。

野池明登 座長
(長野県危機管理監
兼危機管理部長)

貴重なご提案ありがとうございます。他にいかがでしょうか。

山岡耕春 委員
(名古屋大学大学院環境学
境学研究科教授)

来るときの電車で読んでいた、書いたことを、ちょっと僕のメモに名称、ブランドというのがあったり、あとはもうかる工夫というのがメモ書きにあって、1つは要するに、例えば御嶽周辺だといったときに、どういうイメージで売り出すか。結局、長期的にどう地域が維持されていくかということと、防災というのは不可分みたいなことなので、もちろん観光と一体というのも当然そうなんですけども、どういうイメージで売り出すかということも一緒に考えていったらいいんじゃないかと思います。

名古屋から行くとずっと木曾に入っていく。有名なのは、妻籠、馬籠、大体木曾福島の地区とか、割と街道沿いが結構観光として有名で、御嶽地域というのはそこからちょっと入る。だから、入るモチベーションみたいなものが、もちろん登山とかスキーなんですけども、最近でいうと開田の高原の、なかなか経験できないような景色とかいろん

なものがあるんで、そういうのをうまくもっと売り出していただいて、ある種のブランド化をしつつ、それとこういうビジターセンター、マイスターと一体化するという視点が必要なんじゃないかなと思うんですね。

あとは、持続的であることはとても重要で、それはある種のもうかる工夫、ここにはたしかインセンティブを与えるみたいなことが書いてあったんですけど、インセンティブって何だろうと。喜んでもらうというインセンティブ、ちょっともうかるというのはインセンティブになるのかなと。だからそういうものとやっぱりセットにしていくことが大事じゃないかなと思います。

いずれにせよ、地元が主体になるということで、名古屋大学とか私たちも協力は当然するんですけども、多分最初のころは二人三脚で走することは当然ありますが、どこかからは地元がもう本当に旗を振って、我々は引きずられていくぐらいになると一番いいかなと思います。そこまでの工夫をぜひしていただけると、私たちも一緒につき合います。大学の先生も結構いろんな人材、人がいるので、熱心な人がいなくなると途端に熱が冷めたりもしますから、やっぱりどこかで地元が引きずっていくという工夫が重要だと思います。引きずる相手としては、もちろん先ほどの信州大学の教授とかですね、時々は及川さんに来てもらって、ブラタモリじゃなくてブラ及川かなんか。地元を再発見するというような工夫も必要だと思います。

だから、僕、さっきもう1つキーワードが、地域再発見というのがありまして、その地域に育った人が一番地域を知っているかということ実はそういうこともなくて、ほかの地域から来るとなるとここはすばらしいというふうなこともありますから、地域再発見とその地域のブランド化、そういうことをまとめてやっていただいて、長期的に持続できるものにしていくことが大事かなと思います。

及川輝樹 委員

(気象庁地震火山部火山課調査官)

山岡さんがブランド化ということをキーワードにいただきました。ジオストーリーの概念を使うと、手法を使うと、例えば、木曾の街道から御嶽山まで含めてブランド化というような、ストーリーがつけられるんです。例えば御嶽山というのは、火山でできた大きな山体を持っていて、宗教の対象とされていますね。御嶽教の人たちがたくさん来ています。それは日本でも有数の整備された街道、五街道の一つ中山道があり都会から直結できるようなところの脇にあるから人が集まっているんで、そういう側面が非常に大きいと思います。木曾街道があ

ってお客さんがいっぱい来たというのは、やはり火山の恵みなんだよということを再認識することは、いろんな観光地をジオストーリー的な発想でつないでいくということは、結構簡単にできることなんですね。その中でどうやって売り出していくか。このエリアだけじゃなくてそういう形でたくさん整理できる。ぜひそういう観点でまとめていただければと思います。

5. その他

6. 閉会

- ・次回の予定（平成 29 年 1 月を予定）
- ・今後の流れ